



## 第5話 トリボンからの贈り物

しばらく、しんとしすまりかえっていた図書館に、こどもたちの姿が、少しずつ  
少しずつもどってきました。

トリボンは、本のかたちのまんま、棚からそおっとのぞいてみました。こどもた  
ちはみんな、見なれないものを顔の下はんぶんに巻いています。

それが「マスク」というものだと、図書館にはられたポスターで、トリボンはは  
じめて知りました。図書館でもその外でも、学校にいるあいだ、子どもたちはみん  
な「マスク」をしていなければなりません。それは、子どもたちとその家族みんな  
が、元気にこの町で暮らしていくための、たいせつなルールなのです。

「ふうん、それじゃあ、マスクっていうのは、みんなの元気を守ってくれる、いい  
やつなんだ」

ほうかごの図書館で、トリボンはポスターをみあげ、腕をくんでつぶやきました。  
た。

「みんなのわらいかおが見えにくいのは、ちょっとさみしいけどさ」

1年生、2年生、3年生、4年生、5年生、6年生。

つぎつぎ、クラスごとに、子どもたちは入ってきては、すわる椅子の距離をあけて、ねっしんにねっしんに本をひらいています。借りて、家にもって帰ることができないので、そのぶんいっそうていねいに読んでくれているようです。みんなの真剣な目を遠くで見ながら、トリボンは、胸がぎゅっと熱くなりました。そして、図書館を、本を、こんなにたいせつにしてくれるみんなに、なにかお返しをしたくなつたのです。

トリボンは鳥ですが、半分は本ですからね。  
その日の夕方、たまに窓辺に遊びにくる、いたずら好きのカラスたちに、トリボンはたのみごとをしました。落とし物のビー玉一個のかわりにカラスたちは、まっさらなコットンの布をビニールに入れて大量にとどけてくれました。

翌朝、青空を横切っていく、旅行家のキョクアジサシに、四角く切った布のたばをある鳥のところへ運んでくれるようお願いしました。かわいたコッペパン一個とひきかえに、キョクアジサシは喜んで、海を越え、山を越えてきました。

大草原に住むハタオリドリは、キョクアジサシのもってきた布のたばをうけとり、トリボンの書いたお願ひの手紙を読むと、さっそく仕事にとりかかりました。ハタオリドリは、かわりのものはなにも欲しがりませんでした。どんなことより裁縫仕事が好きなのです。

ひと晩で注文の品を縫い終え、キョクアジサシに渡します。キョクアジサシはまた海を越え、山を越え、図書館の窓に、縫いあがった100枚の布を投げ込みました。トリボンとその仲間たちは、待ってましたとばかり、とりどりの絵の具を筆にべったりつけ、いっせいに腕を振るいはじめました。

こんなにもたくさんの鳥たちが、トリボンのアイデアに協力してくれたのは、トリボンが本ですが、やっぱり半分鳥だからですね。

翌日、図書館にはいった子どもたちが見つけたのは、机の上いっぱいにつまれた



ますくマスクでした。そっと手にとってみると、一枚いちまいデザインがちがいます。

「あっ、これ、パンダ餃湯！」

と3年生の田島さん。口には出さず、こころのなかで声をあげます。

「え、これって、はじめてのおつかい」

と1年生の山本さんも目をまるくします。

山とつまれた新品のマスク、その一枚ずつに、図書館にある本の表紙が、一冊いつさつ描かれています。お世辞にも上手とはいえませんが、見ているうち、なんか胸がぽかぽかしてくる、そんな絵です。

「おれ、ごんぎつねにしようっと」

と4年生の足立さんが黙ったまま手にとります。

「この、モモ、っていうの、今度読んでみようかって思ってた」

5年の長谷川さんも同じようにします。

「この、京都絵本っていうの、おもしろそう」

2年生の大山さんはじいっとその絵を見つめます。

「こっちに、注文の多い料理店がある。セロ弾きのゴーシュも」

6年生の西田さん、宮沢賢治に夢中なようです。

しばらくして子どもたちは、それぞれお気に入りのマスクをつけ、席について熱心に本を読みはじめました。トリボンはそおっと棚から頭をだし、図書館の様子をながめました。顔の半分はかくれてしまっているけれど、とりどりの絵のマスクの下に、子どもたちみんな元気に笑っている表情が、マスクをすかして見るようありますと浮かんでいます。

(制作：図書館活用部会)